

インタビュー／SNIA-J

コスト重視から運用・管理や統合・相互運用性へと
マーケットおよびユーザーの関心が移行している

—はじめにSNIA-Jの設立の背景をお聞かせください。

和田 ストレージネットワークング・インダストリー・アソシエーション (SNIA) は、ストレージネットワークングの開発者をはじめ、システムインテグレーター、アプリケーションベンダー、サービスプロバイダー、そして多くのユーザー企業が一堂に介してストレージネットワークングの発展に向けた結束の場を提供する非営利団体として、1997年に米国で発足されました。以来、ストレージネットワークング技術、教育、啓蒙、標準化といった活動を展開し、今日では、SANおよびNAS関連では、世界最大の業界団体に発展しています。特に標準化に関しては、ファイバチャネル、運用、バックアップ、ファイルのネットワークアクセスに加えて、SAN関連製品の相互接続性を検証することを目的とした、大規模なTechnology Centerを米国に開設し、その成果のデモンストレーション活動も行っています。このようなSNIAの活動を日本国内で展開するために、2001年8月に、非営利団体「SNIA日本支部 (SNIA-J)」が設立されました (URL: <http://www.snia-j.org/>)。SNIA-Jのミッションは、SNIAとの連携に基づき、日本国内におけるストレージネットワークングの普及・発展と関連市場の拡大に寄与することです。

—SNIA-Jのビジョンとその実現に向けた活動についてお聞かせください。

和田 SNIA-Jのビジョンは、ストレージネットワークングの普及・発展を加速することによって、国内のストレージ関連市場の活性化を図るとともに、日本の国際競争力の維持・強化に貢献していくために、SNIAとの連携に基づきながら、国内におけるストレージネットワークング技術の普及とビジネスの促進に寄与する活動を



SNIA日本支部
会長
和田 健一氏
(株)日立製作所

推進することです。このビジョンの実現に向けて、2003年度から国内市場動向調査を実施しています。また、東京および大阪におけるストレージ入門セミナーの開催、SNIA-Jが主催するイベント「Storage Networking World/Tokyo (SNW)」の開催なども行い、さらにSNWにおいては、SNIAが推進しているストレージ管理の標準化「SMI-S (Storage Management Initiative Specification: ストレージ管理標準)」をはじめとした相互接続性やソリューションの実機デモンストレーションを会員企業の参加のもと実施しています。この取組みに対しては、SNIAがカバーする相互接続性の範囲をグローバルに拡大したとして、SNIA本部から高い評価を受けています。

—最近、どのような活動を展開していますか。

和田 SNIA-Jでは、2005年度の活動基本方針として、「ストレージネットワークングに関するユーザーの意識、認識、技術を高めるための活動の強化」、「SNCP (SNIAストレージ技術者認定資格)の普及活動を開始 (共通テストの日本語での実施)」、「SNW主催者としての同イベント参画およびイベント自体の強化の推進」、「SNIA全体の当面の最重要活動であるSMI関連活動の国内への普及促進と国内企業の参加支援」などを掲げています。このような活動を通じて、ユーザーニーズの掘り起こしと、ストレージネットワークングの需要拡大に

向けた活動の継続・強化に取り組んでいます。

——ストレージネットワークの動向について、最近のトレンドをお聞かせください。

和田 昨年の秋に米国で開催された「SNW Fall 2005」に参加し、次のようなトレンドを感じました。

- ① CDP (Continuous Data Protection : 継続型データ保護) が顧客に提供する段階に
- ② ワイドエリアストレージネットワークの議論が活発に (WANのストレージサービスの出現)
- ③ ストレージグリッドがホットスポット
- ④ セキュリティは相変わらずユーザーの心配事
- ⑤ ILM (情報ライフサイクル管理) は概念議論から具体的助走段階に
- ⑥ 多くの異なるタイプのストレージ仮想化製品が再登場
- ⑦ SMI-Sの着実な進化

——それぞれのトレンドについてご説明してください。

和田 はじめにCDPですが、これは、データに対する変更を継続的に追跡し、変更を別のストレージに取り込むことによって任意の時点からの回復を可能にする手法のことです。このCDPシステムは、ブロック、ファイル、アプリケーションベースの様々なタイプがあり、復元可能なオブジェクトの範囲をきめ細かく設定することが可能です。SNW Fall 2005では、アプリケーションに依存した多くの実装例が報告されていました。

ワイドエリアストレージネットワークの議論が活発化した背景として、データ量の爆発的な増加、法規制の変化、ビジネス継続性の確保と災害復旧へのニーズの高まり、ネットワークとストレージのコストの低下、技術の進歩などがあげられます。

ストレージグリッドとは、グリッドコンピューティングから派生したアーキテクチャを指します。限定された一定の機能を提供するストレージクラスと異なり、広範囲で変化する機能を提供することができます。

——ILMについては、2004年頃から注目されてきましたが、現状はどのようなのでしょうか。

和田 これまでは、ベンダー間で種々のILMの定義が存在し、業界での統一した定義や目標がなかったのですが、SNIAが整理を行い、現在、そのビジョンを提唱しています。このビジョンは、ILMフレームワークと呼ばれるITインフラストラクチャだけでなく、ビジネスプロセスやポリシーなどのビジネスフレームワークを含めた広い概念です。現在、SNIAに参加している各企業が、このビジョンに基づいた取組みを進めています。

ストレージの仮想化とは、ハードディスク、RAID、テープなどの物理的なストレージ装置を、ユーザー・アプリケーションに対して論理的にマッピングすることです。これにより、装置・ベンダーを越えた構成定義、ストレージ装置ごとの利用率やアクセス率の平準化、運用・管理の一元化が可能になります。

——SMI-Sは以前から注力してきたテーマですが、SNIAでは、今後どのように取り組んでいきますか。

和田 SMI-Sは、ストレージ管理の標準化を目指してSNIAが仕様策定を進め、2004年に1.0版、2005年に1.1版を発表しました。管理対象製品や機能を拡大しながら、現在は各ストレージベンダーがサポートを開始しています。今後もSNWでデモンストレーションを実施するなど、さらなる普及・浸透に取り組んでいきます。